瓜　割　遺　跡

―土地区画整理事業に伴う発掘調査―

2　0　0　0

長岡市教育委員会

序

本書は、長岡市関原地区で行われています土地区画整理事業に伴って実施しました瓜割遺跡発掘調査の報告書です。瓜割遺跡は、昭和30年代の道路工事中で発見された縄文時代中期の遺跡です。

今回の発掘調査では、竪穴住居跡などの縄文時代中期の遺構と、旧石器時代終わりごろの石器が発見されました。旧石器時代の遺跡は、長岡市内ではこれまで３箇所で確認されていましたが、いずれも分布調査で発見された遺跡でした。発掘調査で旧石器時代の石器が発掘されたのは、今回の瓜割遺跡発掘調査が初めてです。それだけに石器の出土数は少ないですが、長岡市の歴史を考えるうえで貴重な資料となりました。本報告書が学術研究のうえで広く活用され、また埋蔵文化財の理解と認識を深められることを期待します。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり事業主体の関原東部土地区画整理組合をはじめ、多くの方々や機関から多大な御協力をいただきました。心からお礼を申し上げます。

平成12年３月

長岡市教育委員会
教育長　大　西　厚　生

例　　言

1　本書は、長岡市五反田町字瓜割に所在する瓜割遺跡発掘調査の記録である。

2　瓜割遺跡の発掘調査は、関原東部土地区画整理事業の調整池工事に伴い、長岡市が事業主体者の関原土地区画整理組合から委託を受けて実施した。

3　発掘調査は、平成11年８月18日から９月17日まで現地調査を行い、12月１日から平成12年３月までに整理作業と報告書の作成を行った。

4　発掘調査で出土した遺物及び測量図面並びに写真等の原記録類は、長岡市教育委員会が保管している。

5　出土遺物への注記記号は、ウリワリ―取上げ番号―グリッド（あるいは遺構名）―出土層序の順で記入した。

6　本書の作成は、調査担当者の駒形敏朗が整理作業員の補助を受けてまとめた。なお、旧石器時代の遺物の実測・トレースは立木宏明氏（新津市教育委員会）から御協力いただき、その記載は立木氏と小熊博史（長岡市教育委員会職員）が執筆した。

7　挿図のうち、地形図等で方位の記入がないものは、真北を上にそろえた。

8　遺構平面図の方位は真北を示し、遺構断面図脇の数字は標高を示した（単位はメートル）。

9　遺構は種別ごとに次の略称を用い、遺構全体図でも略称で遺構を表記した。

10　発掘調査から本報告書の作成まで、多数の方々や機関から御指導・御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

目　　次

1　調査の経過…… 1
（1）調査に至るまで…… 1
（2）調査の経過…… 1
（3）グリッドの設定…… 2
2　遺　跡…… 3
（1）地理的環境…… 3
（2）歴史的環境…… 4
（3）土層序…… 7
3　遺　構…… 7
（1）第1号竪穴住居跡…… 8
（2）フラスコ状ピット…… 10
（3）集石土坑…… 10
4　遺　物…… 11
（1）旧石器時代の遺物…… 11
（2）縄文時代の遺物…… 13
（3）その他の遺物…… 17
5　まとめ…… 19

挿　図　目　次

第1図　瓜割遺跡周辺の遺跡分布及び地形図（1/50,000）…… 3
第2図　瓜割遺跡周辺の地形図（1/10,000）…… 4
第3図　瓜割遺跡周辺の地形図（1/2500）…… 5
第4図　瓜割遺跡発掘調査グリッド図（1/500）…… 6
第5図　土層柱状図（1/40）…… 7
第6図　瓜割遺跡遺構全体図（1/200）…… 7
第7図　第1号住居跡（1/60）及び炉跡（1/30）…… 8
第8図　フラスコ状ピット（1/60）・集石土坑（1/30）…… 9
第9図　細石刃石核原形・削片…… 12
第10図　縄文土器（1）…… 14
第11図　縄文土器（2）…… 15
第12図　須恵器・寛永通宝…… 17
第13図　縄文時代の石器…… 18
写真1　縄文土器（1）…… 20
写真2　縄文土器（2）・石器…… 21

1　調査の経過

（1）調査に至るまで

瓜割遺跡遠景（西から）

長岡市関原町から五反田町にかけて所在する瓜割遺跡、三ノ輪遺跡などを含む地域で土地区画整理事業が計画され、遺跡の確認調査の要請があり、長岡市教育委員会が確認調査を実施したのは平成２年の秋のことであった。計画地内には瓜割遺跡、三ノ輪遺跡、六右ェ門清水遺跡それに瓜割塚群が位置していた。瓜割塚群は現況から塚の位置や規模などが判明するが、地下に埋蔵されている遺跡はその規模などの情報が極めて少ないために試掘調査を行って遺跡の規模などを確認した。確認調査の結果、瓜割は、西側は段丘崖、南北と東側は沢状の地形で囲まれた範囲から縄文時代中期の石組炉１基と縄文土器などが出土した。三ノ輪は縄文時代後期の遺跡として知られていたが、確認調査では縄文時代の遺構及び遺物は発見されず、弥生時代中期初めごろの再葬墓の埋甕が発見された。六右ェ門清水は事業計画地に遺構・遺物はまったく検出されず、遺跡は事業計画地から外れていることなどを確認した（駒形敏朗「長岡市内遺跡群発掘調査―瓜割遺跡・三ノ輪遺跡・六右ェ門清水遺跡・三貫梨遺跡―」長岡市教育委員会　1991年）。

瓜割遺跡近景（東から）

その後、関原東部土地区画整理組合が設立されるなど、土地区画整理事業が本格化し、平成８年には道路建設に伴って三ノ輪遺跡を発掘調査して縄文時代中期の竪穴住居跡１軒を発掘したり（駒形敏朗「長岡市内遺跡発掘調査報告書―藤ヶ森遺跡・五斗田遺跡・三ノ輪遺跡・本途地区・土手端地区―」長岡市教育委員会　1997年）、平成９年にも道路建設に伴って瓜割五ツ塚１号塚を発掘した（駒形敏朗「長岡市内遺跡発掘調査報告書―羽黒窯跡・朴ノ木谷遺跡・瓜割五ツ塚１号塚―」長岡市教育委員会　1998年）。

今回の発掘調査は、瓜割遺跡の南側から三ノ輪遺跡北側に調整池を建設する事業に伴うもので、瓜割遺跡の南端部が調整池工事区域に含まれているために、事業主体の関原東部土地区画整理組合と協議し、工事前に発掘調査を行って記録を保存することにした。なお、発掘調査は長岡市が関原東部土地区画整理組合と委託契約を締結して、長岡市教育委員会が実施した。

包含層の発掘

（2）調査の経過（平成11年８月18日～９月17日）

瓜割遺跡の発掘調査は、８月17日までに事務所・ベルトコンベア―、調査グリッドなどを設置し、18日に調査器材を搬入して発掘調査にか

発掘スナップ

かる諸準備を終える。そして、８月19日から作業員を動員して瓜割遺跡の発掘調査に着手した。

発掘は段丘崖に近い西側道路の際から、徐々に東側に向かって掘り進めていった。発掘を進めるうちに、東及び南側は沢状の地形で傾斜しており頭大から拳大までの礫や掘削した地山土、それに古タイヤなどが投げ込まれていた。そのため、東側の通路部分は当初予定より調査地を若干縮小して発掘することにした。

８月20日、ＩＡ－５・６ｂの地山面に拳大の焼けた礫の塊が検出された。礫は、ほぼ円形に密集して広がっており、調査後に集石土坑と遺構名称を付した。23日、ＩＡ－４ｄで埋甕を伴う長方形石組炉が検出。石組炉は竪穴住居跡の内部施設であり、この炉跡を第１号住居跡とする。25日、旧石器時代終わりごろの細石刃石核原形がＩＡ－６ｆで出土。出土位置は、地山のローム層の上面である。細石刃石核原形の出土地点に近接して細石刃石核原形の削片が出土した。このため、縄文時代の包含層（瓜割遺跡の場合は、表土そのものが包含層）の発掘が終わった時点でローム層を掘り下げて、細石刃石核原形と同時期（旧石器時代）の遺物を探る調査を行った。だが、旧石器時代の遺物は発見することはできなかった。26日にフラスコ状ピットらしい落ち込みを検出する。８月31日に包含層の発掘が終わり、地山面をジョレンで遺構の確認調査を行う。遺構は、既に確認している竪穴住居跡、フラスコ状ピットそれに集石土坑以外は、ピットを10箇所ほど検出した。ピットは発掘したところ、ほとんどが木の根痕であった。遺構確認調査後にローム層の発掘に着手する。ローム層の発掘は移植ゴテを使って少しずつ掘り下げた。それと併行して遺構の発掘を行う。住居跡の発掘は、西側が段丘崖に向かって傾斜して床面は既に削られていた。このため、東側から南北の一部の周壁と柱穴を発掘したにとどまった。遺構及びローム層の発掘は９月13日に、14日には遺構の測量も終わり、図面と遺物の整理を17日までに行って現地における発掘調査を終了した。

細石刃石核出土状況

フラスコ状ピットの発掘

（３）グリッドの設定（第４図）

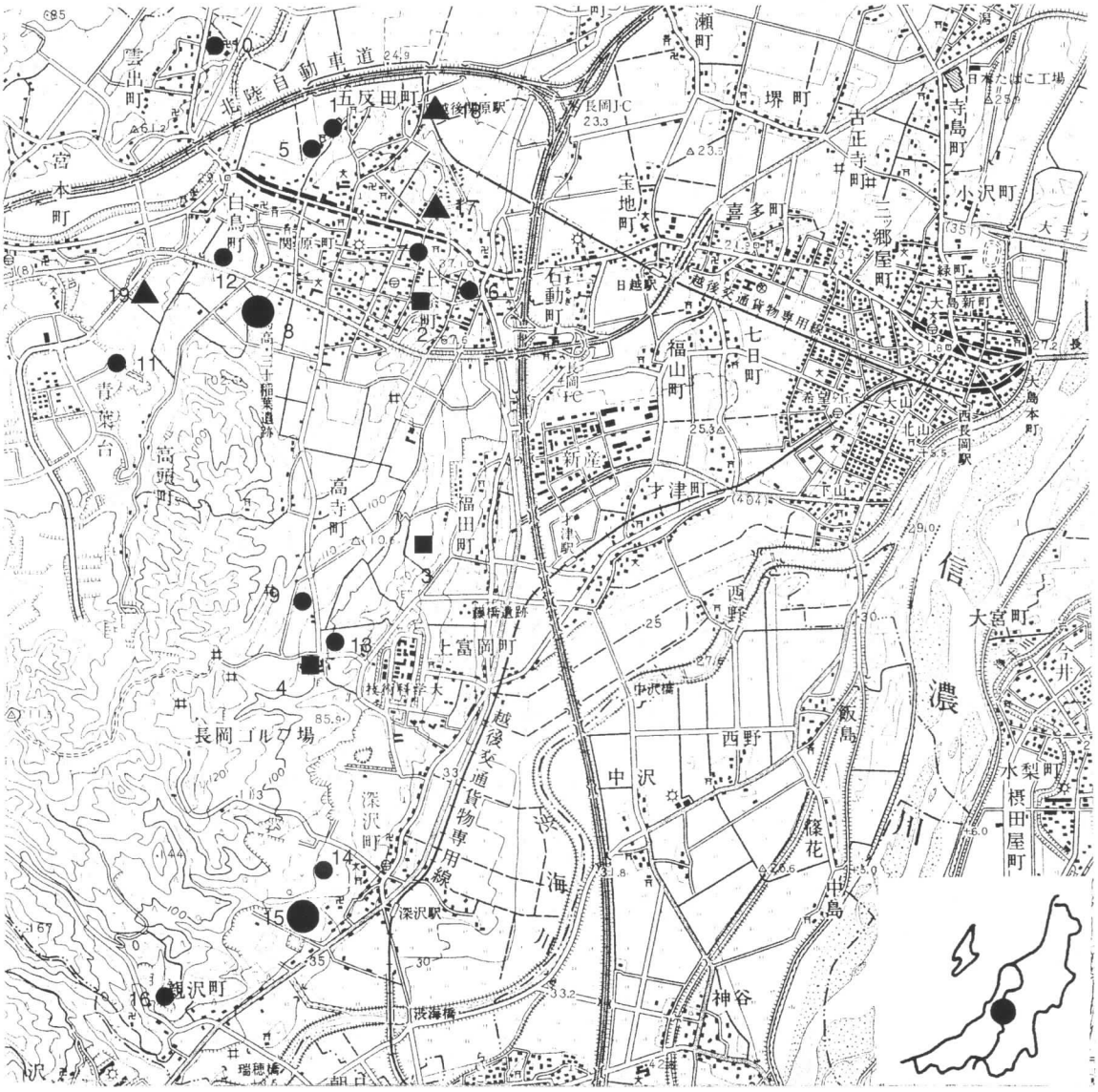
今回の発掘調査は、調査対象地が瓜割遺跡の南側にあたる部分であるが、今後の発掘調査を考慮して遺跡の南西地点にグリッドの原点を置いて20×20mを大グリッド、大グリッドを２×２ｍに区分して小グリッドとした。グリッド名称は、原点から東が英数字とアラビア数字、北に向かってはアルファベットの大文字と小文字を用いて「ＩＡ－１ｂ」などと呼称することにした。

2　遺　跡

（1）地理的環境（第1～3図）

長岡市は新潟県のほぼ中央部に位置している。長岡市南部の小千谷市付近で新潟平野に顔を出した信濃川が、市内の中央部を北へ向かって流れ、市内を東西に大きく二分している。右岸側には「東山丘陵」と呼ばれる魚沼丘陵が南北に連なり、西には南からの東頸城丘陵で遮られている。長岡市を二分している信濃川は、県境から信濃川中流域の左右両岸に数面の河岸段丘を発達させている。長岡市では右岸には顕著な河岸段丘は見られないが、左岸側は高寺面・関原面・上富岡面・深沢面の四面の河岸段丘が発達している。左岸側の河岸段丘は総称して「関原丘陵」と呼ばれることが多い。

瓜割遺跡は、関原丘陵が北の沖積地に張り出す河岸段丘の上富岡面の西側縁辺部に位置している。標高は約33m、沖積地の標高差は約８ｍを測る。現状は山林である。遺跡の南には沢が入り、その沢が遺跡の東側で埋没沢となって遺跡地を区切っている。西側は沖積地の水田に続く段丘崖で、北側は沖積地へ続く傾斜面となっていた。西側の段丘崖の下には随所で清水が涌き出て、かつては水田の用水としても利用さ



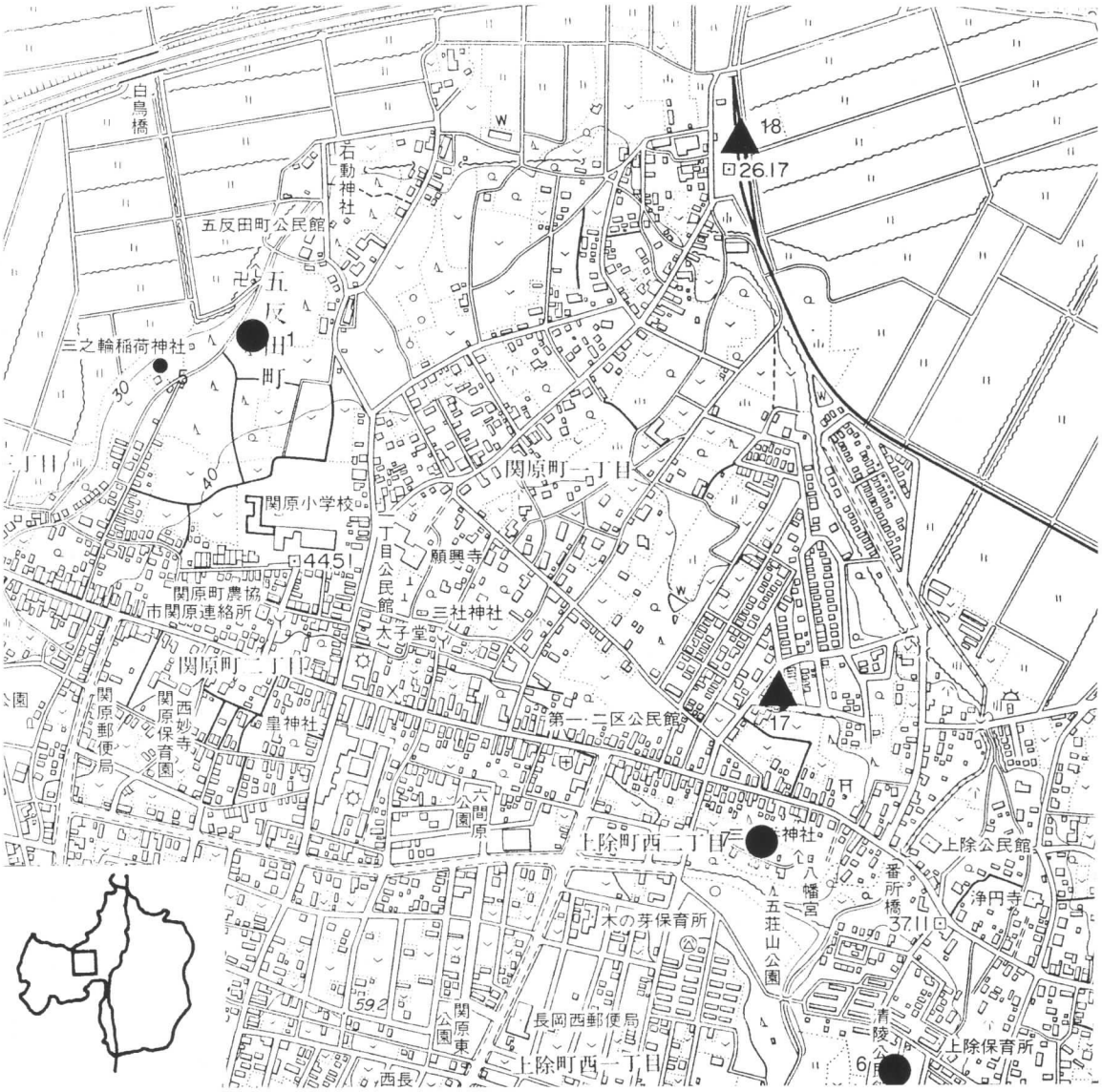
第1図　瓜割遺跡周辺の遺跡分布及び地形図（1/50,000、長岡）
旧石器の遺跡（■）・縄文中期の遺跡（●）・古代の遺跡（▲）

れていた。例えば、瓜割遺跡の近くでは「瓜割清水」が、三ノ輪神社の南には「六右ェ門清水」といった清水である。

（2）歴史的環境

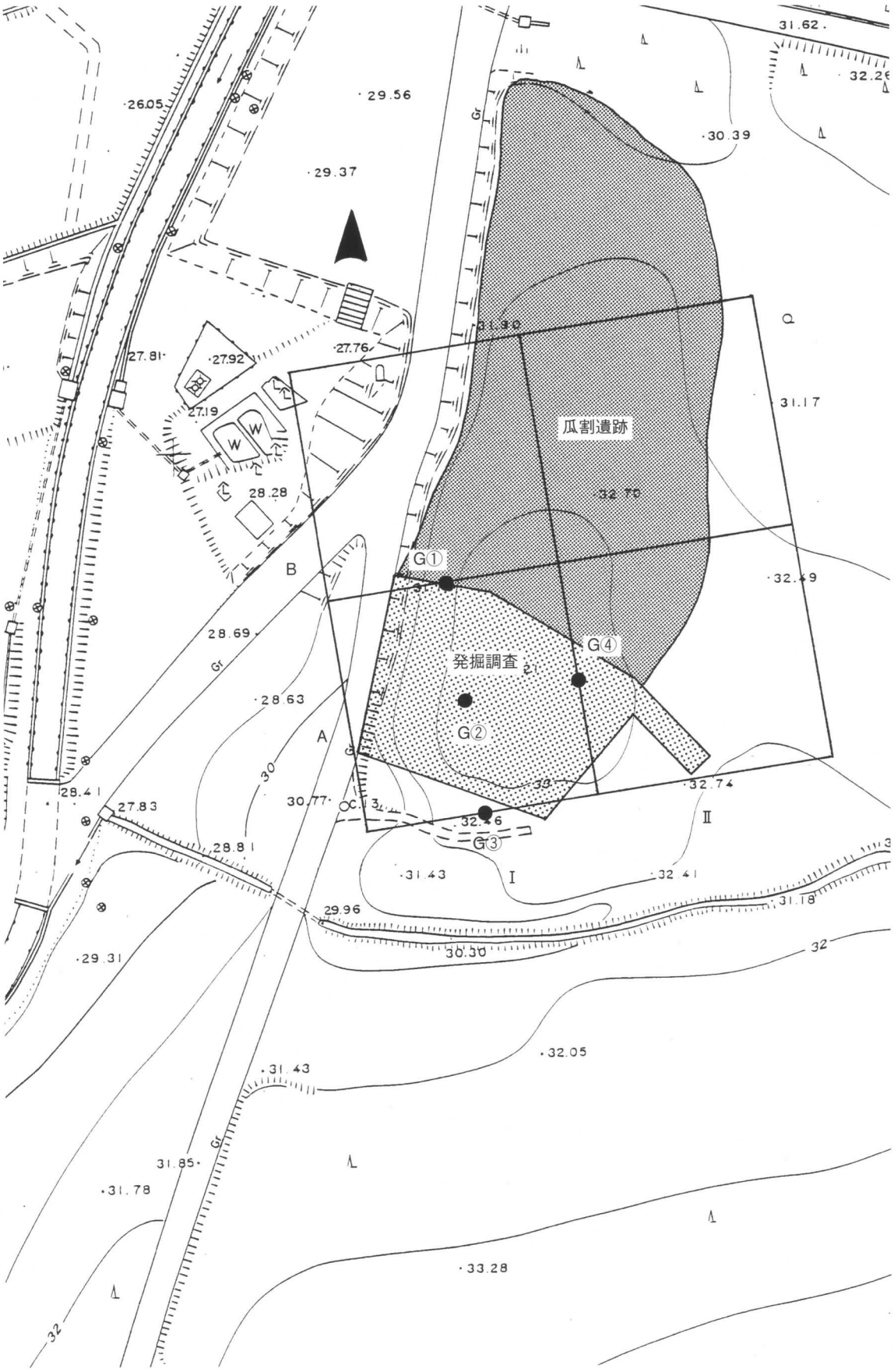
瓜割遺跡の今回の発掘調査で出土した遺物は、旧石器時代、縄文時代中期それに平安時代に属する土器や石器などである。第1図は信濃川左岸の河岸段丘に所在する瓜割（1）と同じ時代・時期の遺跡をプロットしたものである。旧石器時代の遺跡（■）は尖頭器が採集されている五荘山（2）、彫器の長峰団地西（3）、それに石刃採集の大沢（4）の3遺跡があり、縄文中期（●）は火焔土器出土の馬高（8）をはじめ、小形の竪穴住居跡が1軒発見された三ノ輪（5）、土偶が多数出土した南原（6）、80数軒の竪穴住居跡を核にした大集落跡の岩野原（15）、中期前葉の笹山（16）、それに転堂（7）、駒村（9）、火振り坂（10）、城扣（11）、鎌田山（12）、松山（13）、雉子打場（14）の12遺跡があり、須恵器や土師器を出土した平安時代の遺跡（▲）には浄円寺山（17）・下屋敷（18）・白鳥蛇山（19）の3遺跡が図中にある。

いずれの遺跡―特に縄文時代の遺跡は関原丘陵の縁辺部もしくは馬高のように大きな沢（遠藤沢）に面したところに位置している。この関原丘陵に所在する縄文中期遺跡の中で、馬高は遠藤沢を挟んで後期の



第2図　瓜割遺跡周辺の地形図（1/10,000）

第3図　瓜割遺跡周辺の地形図（1/2500）



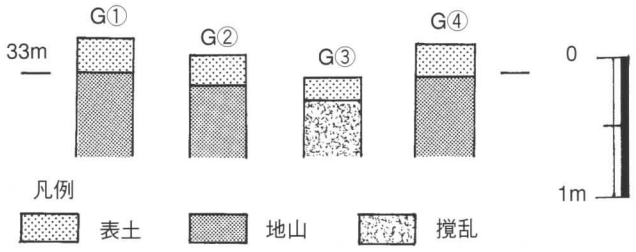
第4図　瓜割遺跡発掘調査グリッド図（1/500）

三十稲場と対峙し、岩野原は遺構の空白地帯を挟んで後期の集落域と同じ台地にある大集落跡である。この関原丘陵の縄文中期遺跡は、馬高や岩野原といった大集落を中心に、三ノ輪・瓜割や笹山などの小規模の集落跡と合わせて一つのテリトリーを形成していると言えよう。

なお、旧石器時代の遺跡は、いずれも表面採集で１点ずつの石器を採集した遺跡であり、発掘調査で遺物が出土したのは今回の瓜割が最初である。また、平安時代の遺跡のうち下屋敷が昭和30年代に行われた緊急発掘で墨書土器などが出土している。それ以外の遺跡は、未発掘のこともあってその実態は不明な点が多い。

（３）土層序

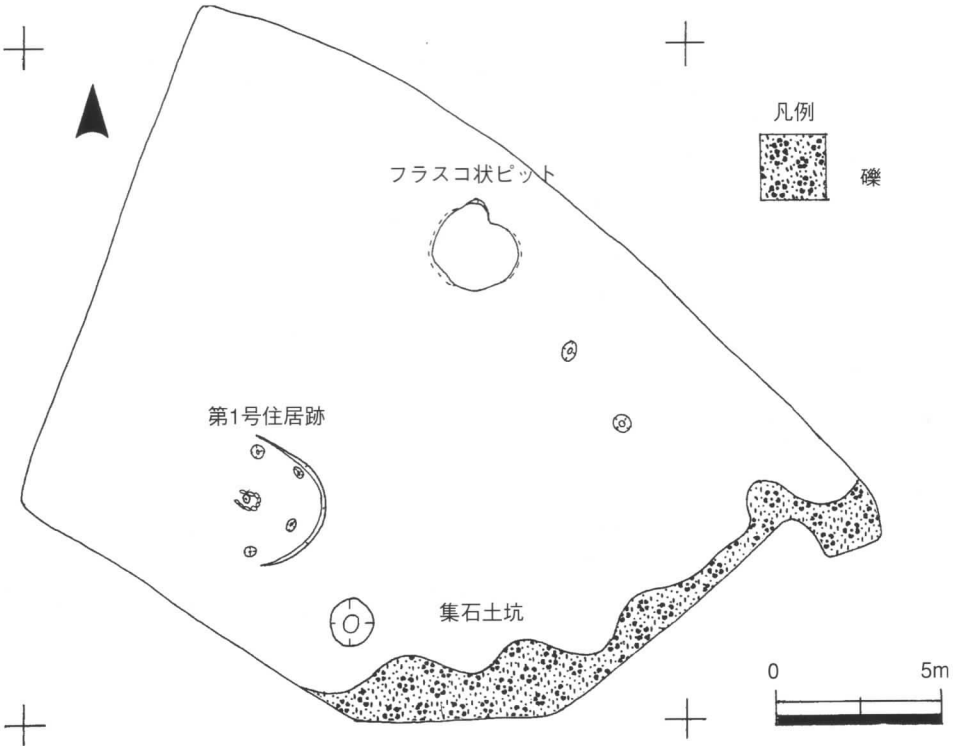
瓜割遺跡の基本土層は、若干黒色を呈する表土と地山の黄褐色土だけで、関原丘陵上での通常見られる黒褐色土を含む土層序ではない。これは瓜割の現況が山林であり、表土そのものが遺物包含層となっていた。なお、土層柱状の観測点は第４図でＧ１～Ｇ４と表記した点である。表土は15～20cmと薄い。地山はローム層で、西の段丘崖方向と、東及び南の沢に向かって傾斜していた。



第５図　土層柱状図

３　遺構

今回の発掘調査は、瓜割遺跡の南端部に相当する部分の約300㎡を対象にして行った。この狭い中で確認された遺構は、竪穴住居跡１軒、フラスコ状ピット１基、それに集石土坑１基である。竪穴住居跡とフ



第６図　瓜割遺跡遺構全体図

ラスコ状ピットは、縄文時代中期の土器が出土しており時期の特定が判明したが、土器などの遺物が出土しない集石土坑の時期は不明である。ただ、縄文時代中期の集落域に位置していることなどから疑問符つきながらも縄文時代中期の遺構として取り扱うことにした。

（1）第１号住居跡

位　　置：瓜割遺跡南西部の傾斜面に位置していた。おそらく遺跡の南西端に相当する箇所と思われる。

平面形態：楕円形竪穴住居跡

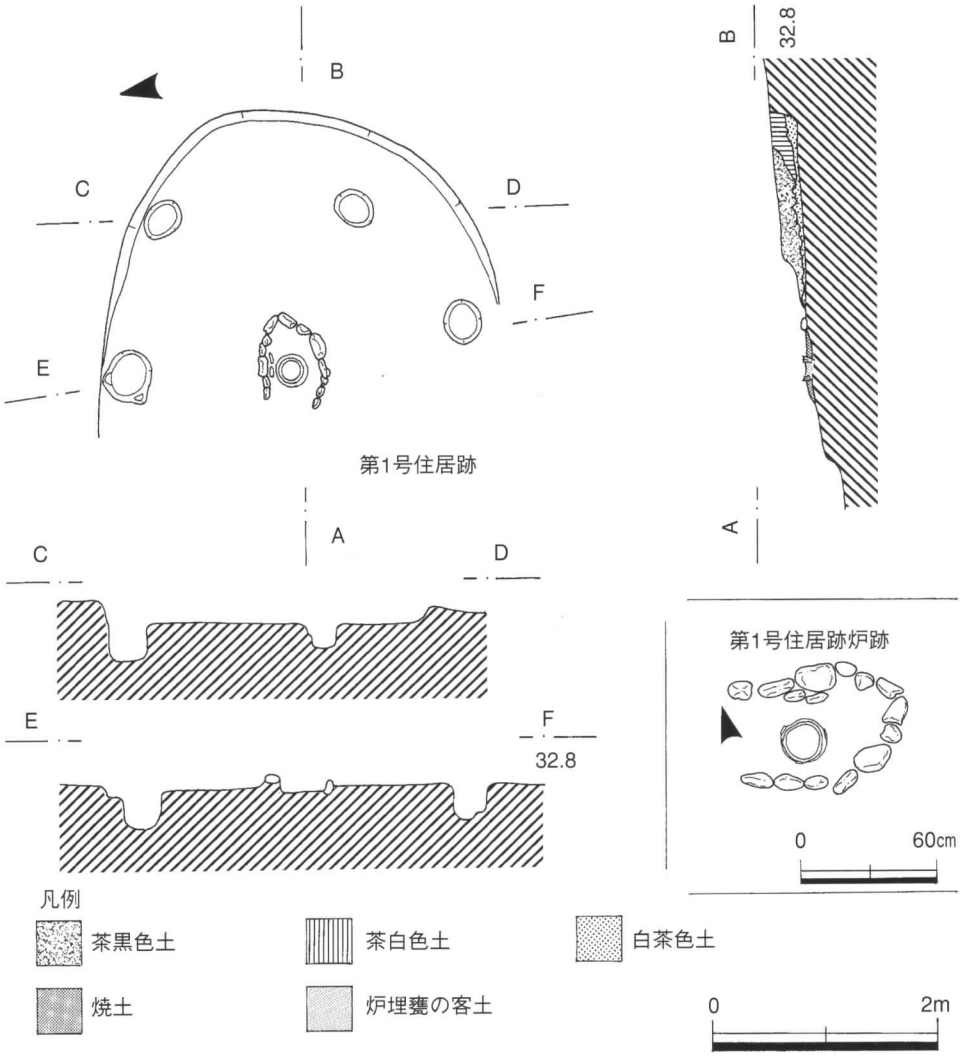
規　　模：長軸３ｍ（残存長さ）×短軸約3.8m、周壁の高さ約20cm。

内部施設：炉跡・柱穴

　炉　　：長方形石組炉。内部に埋甕。

柱　　穴：４本（確認された柱穴）。

遺跡全体写真



第７図　第１号住居跡及び炉跡

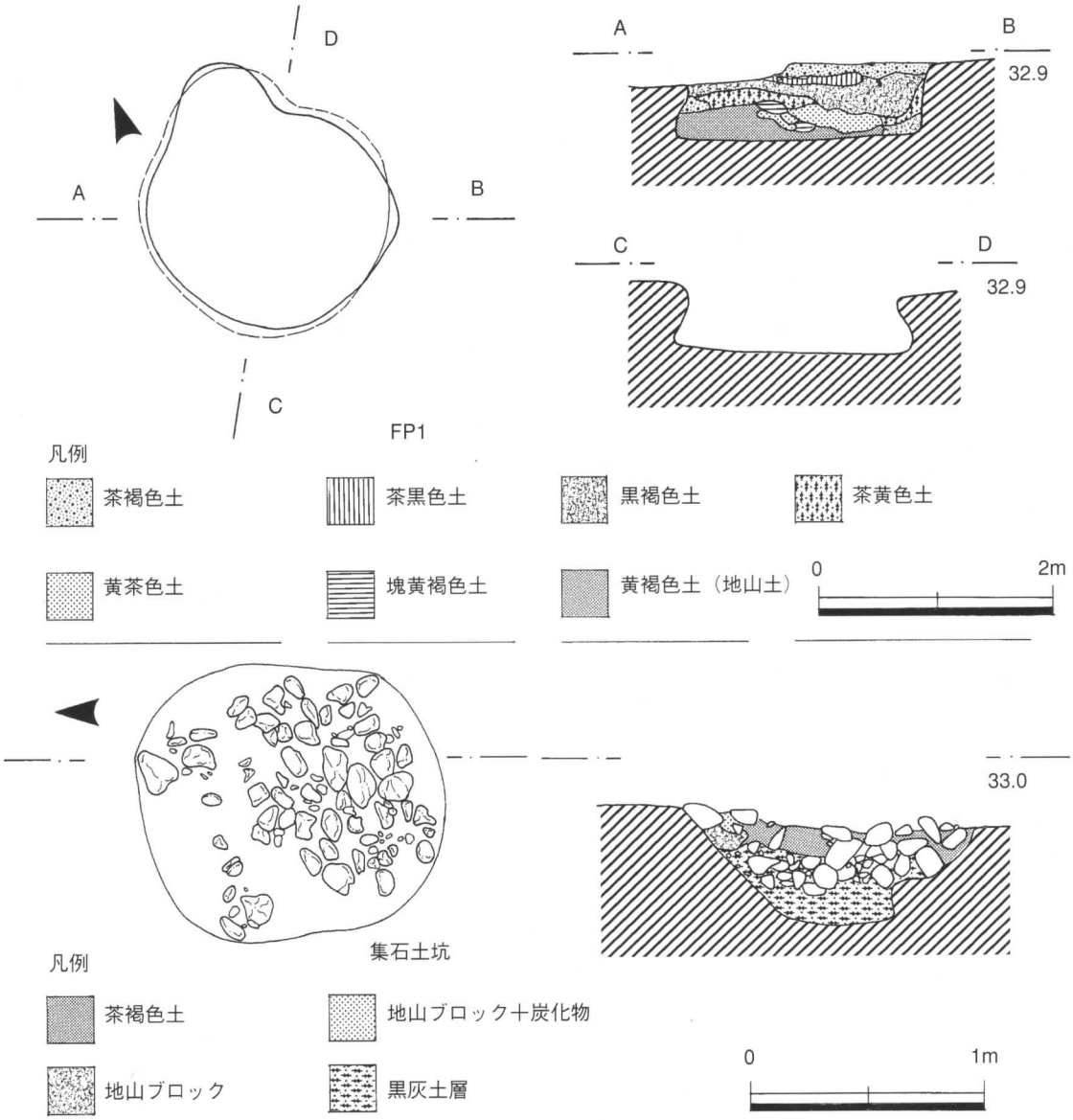
周　　溝：確認されなかった。

遺　　物：埋甕の縄文土器１個、縄文土器片156点（1,175ｇ）。

時　　期：縄文中期大木８b式期（埋甕の年代観から）。

そ の 他：本住居跡は、地山面が西に向かって傾斜しているところに位置していた。このため、住居跡の西側部分の床面及び柱穴は確認することができなかった。炉の西側部分の炉縁石が取り除かれていた。おそらく西側を通る道路工事などのおりに旧地形が削平されたものと考えられる。

第１号住居跡



第８図　フラスコ状ピット・集石土坑

フラスコ状ピット

（2）フラスコ状ピット

位　　置：竪穴住居跡の北側。

平面形態：不整円形

規　　模：開口部長軸210cm×短軸185cm、基底部直径200cm、深さ65cm。

遺　　物：縄文土器128点（1,305ｇ）

時　　期：縄文中期前葉大木7ｂ式期

そ の 他：天井部が崩落しており、天井部の地山土が基底部に落ち込んでいた。

基底部付近の断面形態がフラスコ状に抉れているところからフラスコ状ピットと判断した。

集石土坑の発掘

（3）集石土坑

位　　置：竪穴住居跡の南側に位置していた。遺跡南端部に相当すると思われる。

形　　態：平面は隅丸方形。断面は丸底であるが、南側の底部は垂直に落ち込んでいた。

規　　模：天端部長軸260cm×短軸230cm、深さ110cm。

遺　　物：なし

時　　期：不明。集石土坑に伴う遺物がないために不明であるが、竪穴住居跡の近くに位置しいること、瓜割の主体的な時代・時期が縄文中期であることから縄文中期の遺構と考えられる。

そ の 他：集石土坑は、焼けた小石から拳大の礫が確認面から基底部までたっぷりと詰まっていた。また、覆土には灰と炭が混じった黒灰土が大半であった。このことから、集石土坑の性格は、土坑に食材を入れてから焼けた礫を投げ込んで食材を蒸し焼きにする施設かと考えられる。

集石土坑の平面

集石土坑の断面

4　遺物

今回の調査では、旧石器時代の石器、縄文時代中・後期の土器と石器、それに平安時代の須恵器片と江戸時代の寛永通宝が出土した。

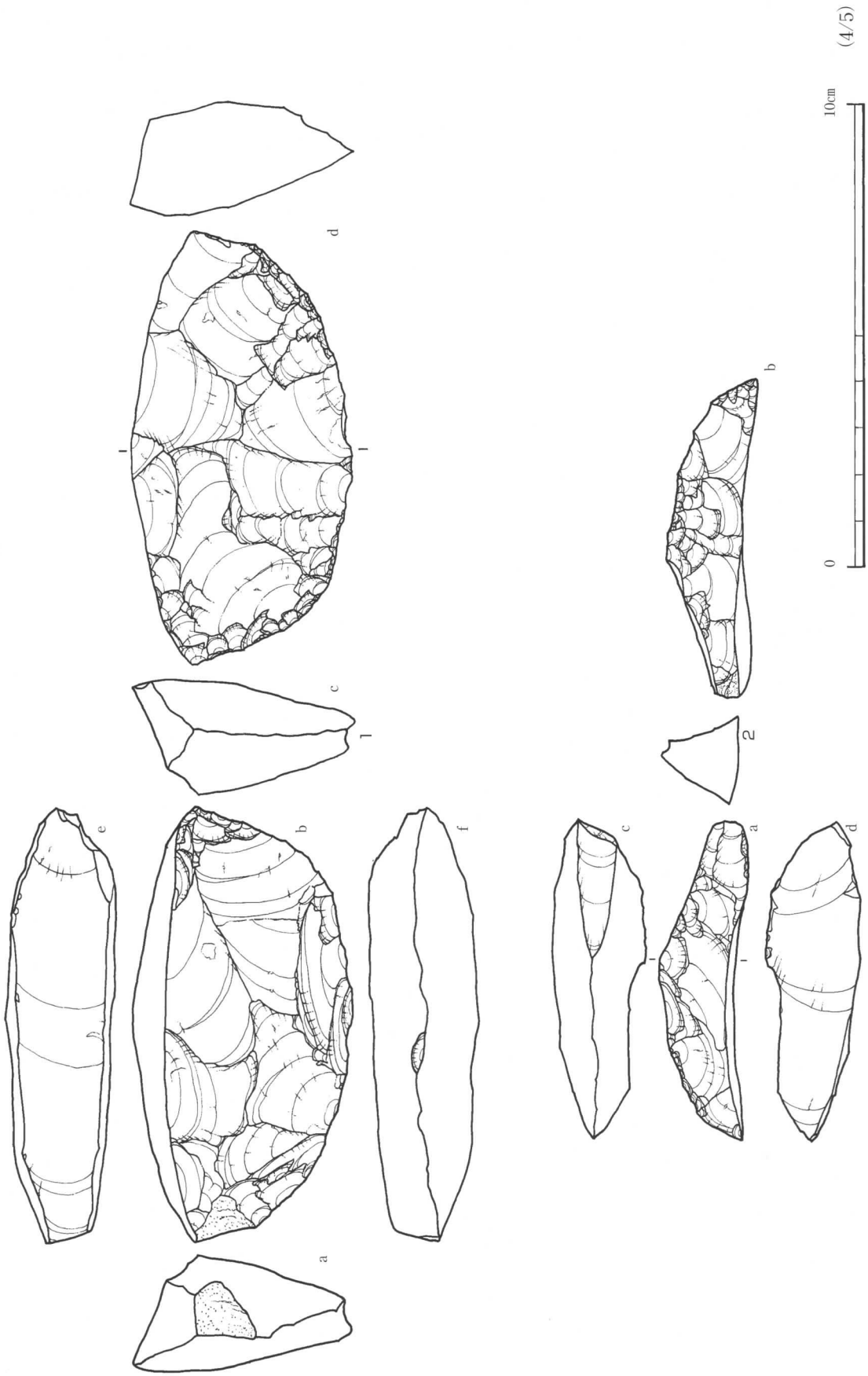
（1）旧石器時代の遺物

細石刃石核原形（ブランク）と削片（スポール）が各１点ある（第９図）。両者ともＩＡ－６ｆ区の地山（ローム層）上面から出土した。出土地点周辺の土層堆積は薄く、攪乱を受けている箇所もみられることから、原位置を保っていた可能性は低い。

１は細石刃石核原形で、長さ10.8・幅2.8・厚さ5.5cm、重量104gを測る。楕円形状の両面調整体から削片の剥離を経て、甲板面が器体の約2/3程度に達した直後の段階の形態をとどめているとみられる。細石刃は剥離されていない。石材は黄褐色の軟質の珪質凝灰岩である。一次剥離面を残していないため不明瞭であるが、ｂ面左側縁に礫面を一部残すことから、原礫あるいは礫面を残した厚手の剥片を素材としていることが考えられる。両側面の石核調整には精粗の差がみられる。ｂ面は求心状の粗い調整の後に右端と下端からの調整を施す。右端の調整は細かく連続的で、下端の調整は粗く階段状を呈する。また右端甲板面からの調整はスポール削出後の調整である。一方、ｄ面は調整が密で、ｂ面と同じく求心状の粗い剥離の後に下端左側縁と右側縁に連続する細調整が施され、階段状の剥離となる。この調整で最終的な石核を形づくる成形調整となっている。左側縁上方に甲板面を打面とした調整を施す。ｅ面には凸状に湾曲するスポール削出痕が残る。ｂ面右側縁・ｄ面左側縁の調整を打面として削片が削出され、その削出面が器体に対してやや傾斜することが特徴的である。細石刃剥離はｂ面左端から開始されると予測される。

２はスキー状削片で、長さ7.9・幅2.4・厚さ2.2cm、重量18gを測る。青灰色の珪質頁岩を石材とする。断面は略三角形状である。先行して一面の稜付削片（ｃ面）が削出されている。ａ面には上端からの粗い

細石刃石核原形・削片



第9図　細石刃石核原形・削片

剥離の後に細かい成形段階の調整痕が残る。右側縁には削片削出前の打面調整が２条施されている。ｂ面には上端からの粗い剥離痕と階段状の細かい調整剥離が認められる。ａ面の右下縁に残る部分的な微細剥離痕は、削片削出後にスクレイパー等として使用された痕跡の可能性を示している。

今回出土した２点は、長岡市内で初めて確認された旧石器時代終末の細石刃文化関連資料として重要である。細石刃石核原形は、新潟県内では下田村中土遺跡、川口町荒屋遺跡、津南町正面中島遺跡、新発田市上ノ山Ｃ遺跡で出土している。本遺跡の資料は両側面の石核調整に精粗がある点で中土遺跡例に類似する。いずれも比較的軟質な在地の珪質凝灰岩を石材としていることが特徴的である。県内の細石刃石器群の編年は、矢出川技法あるいは荒川台技法から湧別技法あるいはホロカ技法への変遷が概ね支持されている。本遺跡の石器は後者に属し、湧別技法による細石刃製作技術が用いられていると考えられる。またその中でも、入念な調整と端正な形態の細石刃石核を作出する中土遺跡例に最も近く、湧別技法をもつ石器群の中でも古相を示している。

（２）縄文時代の遺物

・縄文土器（第10図・第11図）

今回の発掘で出土した縄文土器の量は、第１号住居跡の炉の埋甕を含めて1815点（29.593kg）である。出土土器の時期は縄文中期が主体で、後期が若干量出土している。なお、第１号住居跡及びフラスコ状ピット出土の遺物もここで記載する。

第１号住居跡出土土器（１～13）

１は第１号住居跡の石組炉の埋甕で、口縁と底部を欠損した深鉢形土器の胴部である。文様は上下方向の沈線が半裁竹管で描かれている。縄文中期大木８b式段階の土器である。高熱を受けていたために色調が赤褐色に変化し、土器自体はぼろぼろとなっており、埋甕として使用されたことを裏付けている。

２～13は住居跡の浅い覆土から出土した土器である。２～４は１と同じように縦方向の沈線文が引かれ、２には渦巻き文の一部である円弧の沈線が縦方向の沈線の上に描かれている。大木８b式の深鉢形土器である。８は無文の口縁部文様帯と胴部文様帯を区切る横位の沈線と、縦の沈線が描かれた深鉢形土器である。６・７・９は無文の口縁部と、斜縄文の胴部文様帯からなる深鉢形土器である。10～13の縄文施文の土器と同じく、いわゆる粗製土器である。

フラスコ状ピット出土土器（14～17）

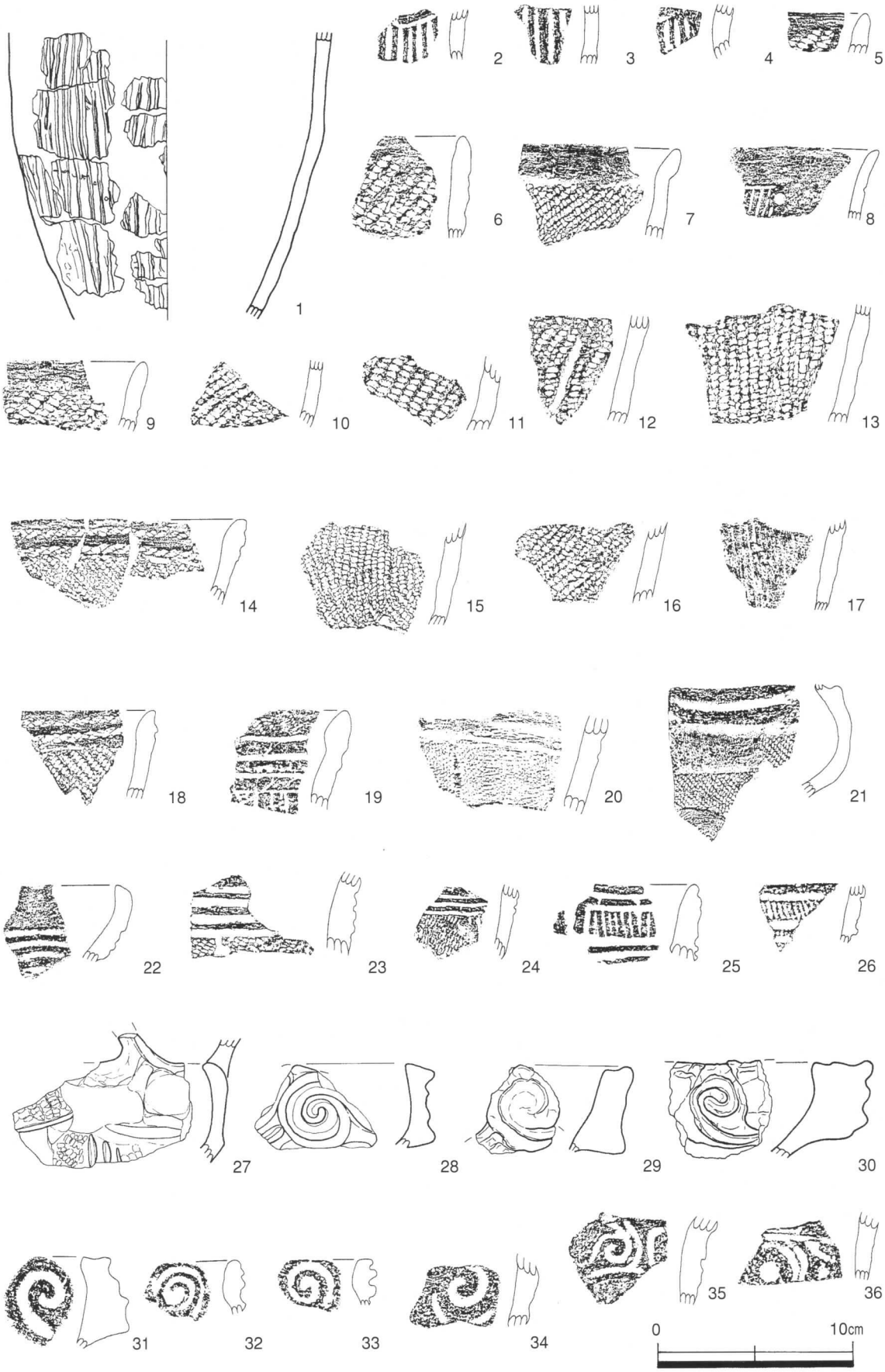
フラスコ状ピットの覆土から出土した土器である。14は口縁部に撚糸の側面が２条押し付けられた縄文中期大木７ｂ式の深鉢形土器である。撚糸側面圧痕文は、大木８ａ式段階まで続くこともあるが、本例は大木７ｂ式段階の土器と思われる。17はやはり大木７ｂ式の木目状撚糸文の土器。15・16は斜縄文の深鉢形土器である。

縄文中期前葉段階の土器（18～20）

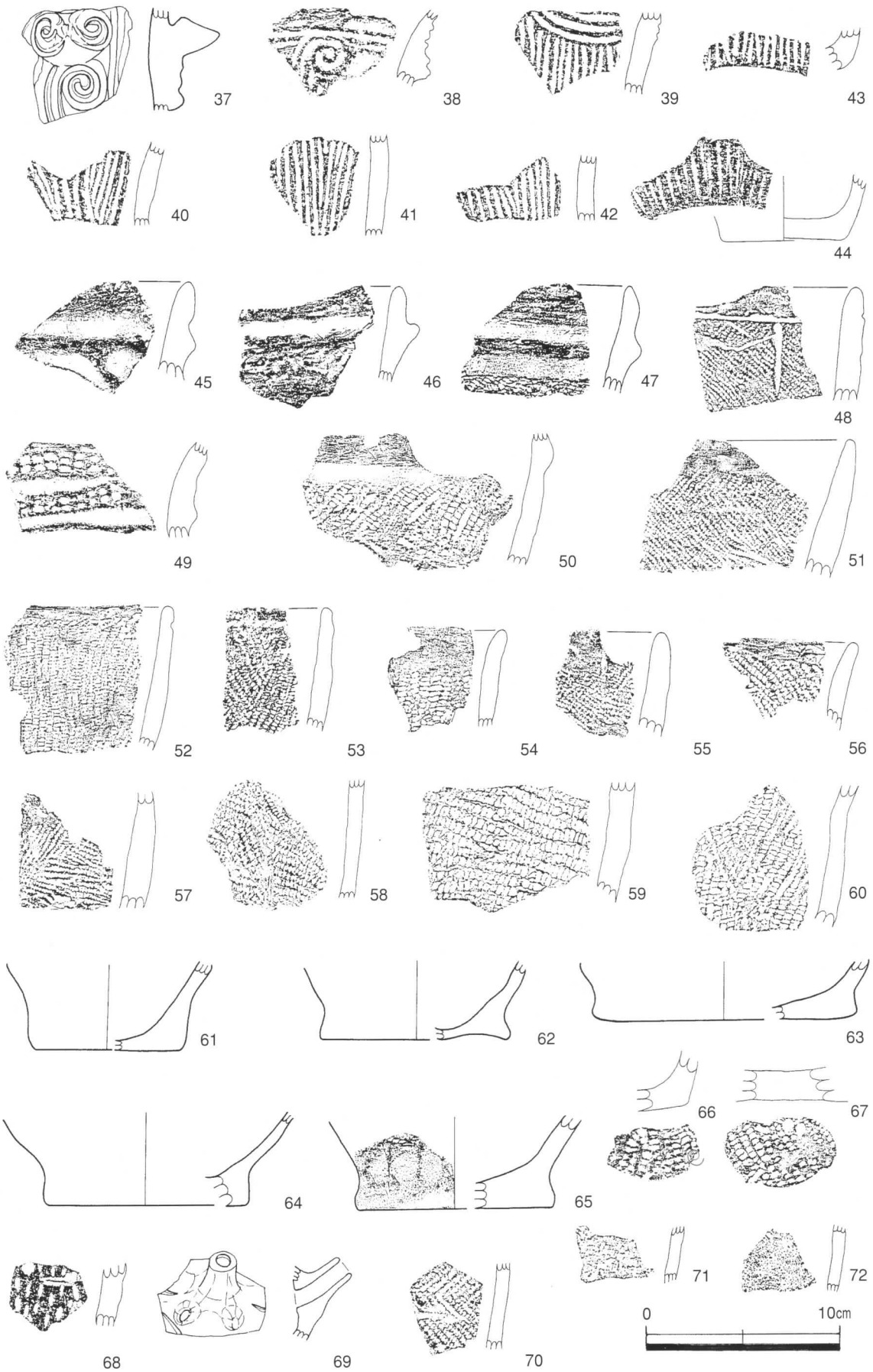
東北地方南部の大木７ｂ式、および北陸地方の新崎式の土器が出土している。18はフラスコ状ピット出土の土器と同じ大木７ｂ式の撚糸側面圧痕文の土器で、拓影下部の円弧は土器の焼成前に穿った孔である。19は縄文を地文とした上に竹管の沈線を引いた土器、20は木目状撚糸文の土器で、19・20ともに北陸の新崎式の影響を受けた土器である。

縄文中期中葉段階の土器（21～44）

大木８ａ式・大木８ｂ式段階の土器をまとめた。21は小波状口縁のキャリパー形土器の口縁部から胴部上部の破片で、口縁に沿って１条の隆起線があり、無文帯を挟んで胴部に細い斜縄文の微隆起線で区画し


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
10cm

第10図　縄文土器（1）


37
38
39
43
40
41
42
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
66
67
64
65
71
72
68
69
70
0
10cm

第11図　縄文土器（2）

た磨消縄文が施されている。22～24は無文の口縁と３～４条の平行沈線文が頚部を巡り、胴部の斜縄文を区画している。25・26は口縁部に長方形の区画内に上下の沈線文を充填して文様を描いている。27～36は渦巻き文の土器である。27は突起を持つ口縁部から頚部の破片で、口縁から頚部にかけて縄文が施されている。突起の部分は剥落して文様は不明であるが、おそらく突起から剥落部分に渦巻き状の文様があったものと考えられる。28～33は口縁部に立体的な渦巻き文がつけられた土器で、34～36は渦巻き沈線文の土器である。なお、34・36は縄文を地文として渦巻き文を施している。21～36はいずれも大木８ａ式から大木８ｂ式段階の深鉢形土器で、どちらかと言えば大木８ｂ式に近い文様と思われる。

37～39は大木８ｂ式のキャリパー形土器の頚部から胴部にかけての破片で、渦巻き文が立体的に表現されている。37は立体的な渦巻き文が頚部と胴部に施された土器で、大木８ｂ式段階でも古手のほうであろう。39～44は大木８ｂ式の中でも新しい段階のキャリパー形土器で、円弧状の頚部と垂線の胴部で文様が構成されている。43・44は底部（44）及び底部直上の破片（43）である。

以上は、東北地方の大木式土器様式の系譜を引くものであるが、その他に在地の火焔型土器の破片が出土している。写真１―73がそれで、火焔型土器の鶏冠状把手の破片である。

縄文中期後葉段階の土器（45～49）

中期末葉の大木10式段階の在地系と思われるものである。45は隆起線で口縁に平行する線とそこから胴部への弧状線が施され、46・47は蓋受けのような隆起線が口縁を巡っている。45・46は波状口縁の深鉢形土器である。47も46と同様な波状口縁をもつ深鉢土器の平口縁部分の破片と考えられる。48は平口縁の深鉢形土器で、無文の口縁と縄文の胴部とを区画する沈線が１条頚部を巡っている。胴部の垂線は文様として引いたのか、その後の破損線かは不明である。49は２条の列点が隆起線と口縁の下に施されている。

縄文中期の粗製土器（50～60）

縄文が施されただけの、いわゆる粗製土器を集めた。瓜割の主体的な時期が縄文中期であること、および土器の器壁が厚いことなどから縄文中期の粗製土器の一群とした。50～56は口縁部の破片で、無文帯が広いもの（50・51）と、若干狭いもの（54～56）などがある。53は２方向から縄文の原体を回転させて縦方向の羽状縄文を描き出している。

縄文中期の底部（61～67）

ここにまとめたのは、縄文中期の土器底部破片である。中期の土器底部は底部直上で若干くびれて外へふんばるものが多い。65は底部付近の器面調整が指撫でで行われたことを示すために拓影を掲げた。66・67は網代痕跡が底面に付着している土器である。

縄文後期の土器（68～72）

量は少ないが、縄文後期の土器が出土している。68は後期前葉の三十稲場式の刺突文が施された深鉢形土器である。69は中葉から後葉段階にみられる上向きの注口に２個の瘤がついた注口土器であるが、瘤がつくところから、どちらかと言えば後葉の瘤付土器様式段階のものと考えられる。70は中葉段階の羽状縄文の土器、71・72は同じ時期と思われる縄文施文の土器であるが、縄文が拓影で表現できないほど炭化物が付着していた。

・石　器（第13図）

今回の発掘調査で出土した縄文時代の石器は、打製石斧５点、磨製石斧３点、敲石１点、凹石３点、石皿１点、磨石５点、その他に石核が１点ある。通常の縄文時代中期の遺跡に見られる石鏃などは、今回の

発掘では出土しなかったが、存在していた可能性が高い。なお、石器は住居跡などの遺構覆土からの出土はなく、いずれも包含層出土である。

5点出土した打製石斧の内訳は、完形が1点、略完形が1点、基部が1点とそれに未製品が2点である。完形（74）・基部の一部を若干欠けている略完形（75）の打製石斧2点は、刃部の幅が基部との比率が1.5未満の短冊型である。74・75の刃部はいずれも片刃で、刃部の平面形は74が円刃を、75は直刃を呈する。重量は74が約130ｇ、75が約95ｇである。石材は74が凝灰岩、75が粘板岩である。

完形の磨製石斧は1点で、刃部側を欠損した磨製石斧が1点、未製品が1点である。77は小形の定角式磨製石斧で、刃部には一度欠損したものを再加工した研磨痕がみられる。重量は約25ｇで、石材は頁岩を使っている。76は両側面と頭部が研磨された定角式磨製石斧で、基部側約1/3が遺存している。頭部は稜線を作り、断面は隅丸長方形となる。残存部の重量は約100ｇ。石材は蛇紋岩。

78は、長方形の扁平礫の一端に敲打痕がみられる敲石である。側縁部に面的なツブレがあり、表面にも面的なツブレがみられる。凹石や磨石からの転用かどうかは不明である。重量約130ｇ。石材は安山岩。

安山岩を石材とする凹石が3点出土している。いずれも形状が扁平礫の凹石である。81は片面に複数の使用痕を持つ凹石で、主な使用痕の凹みは2個一対である。82は両面に単独の使用痕の凹みを持つ。ほぼ中央部で欠損したような形状である。凹石は磨石や敲石に転用することが多いが、82は欠損部分で敲石のようなツブレは確認されず、敲石に転用したのではなく、欠損部分が若干摩滅しており、どちらかと言えば磨石に転用された可能性がある。重量は81が約610ｇ、82が約210ｇである。石材は安山岩である。

磨石は4点出土しているが、縄文時代に一般的な円礫の磨石は3点で、それ以外の1点（80）は、横断面が三角形を呈し、三角形の稜線が使用痕で摩滅している特殊磨石（いわゆる「穀摺（こくずり）石」）の類である。石材は安山岩を使用している。

穀摺石は縄文時代早期の押型文土器に伴って出土することが多い石器であるが、今回の発掘では瓜割から押型文は出土していない。よって、今回の発掘で出土した穀摺石の時期は不明であるが、今後の発掘で押型文が出土しないとは言いきれないため、今後の調査に期待したい。重量は約40ｇである。

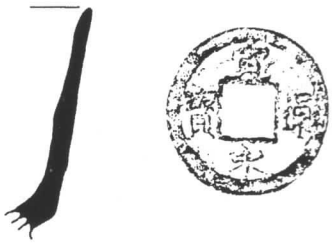
その他に石鏃の加工途中の未製品と思われる剥片が1点出土している。79がそれで全面が剥離されている。重量は約40ｇを計る。

（3）その他の遺物

旧石器時代・縄文時代以外の平安時代や近世の遺物が各1点ずつ出土している。ここでは平安時代の須恵器と江戸時代の古銭について記載する。

・須恵器

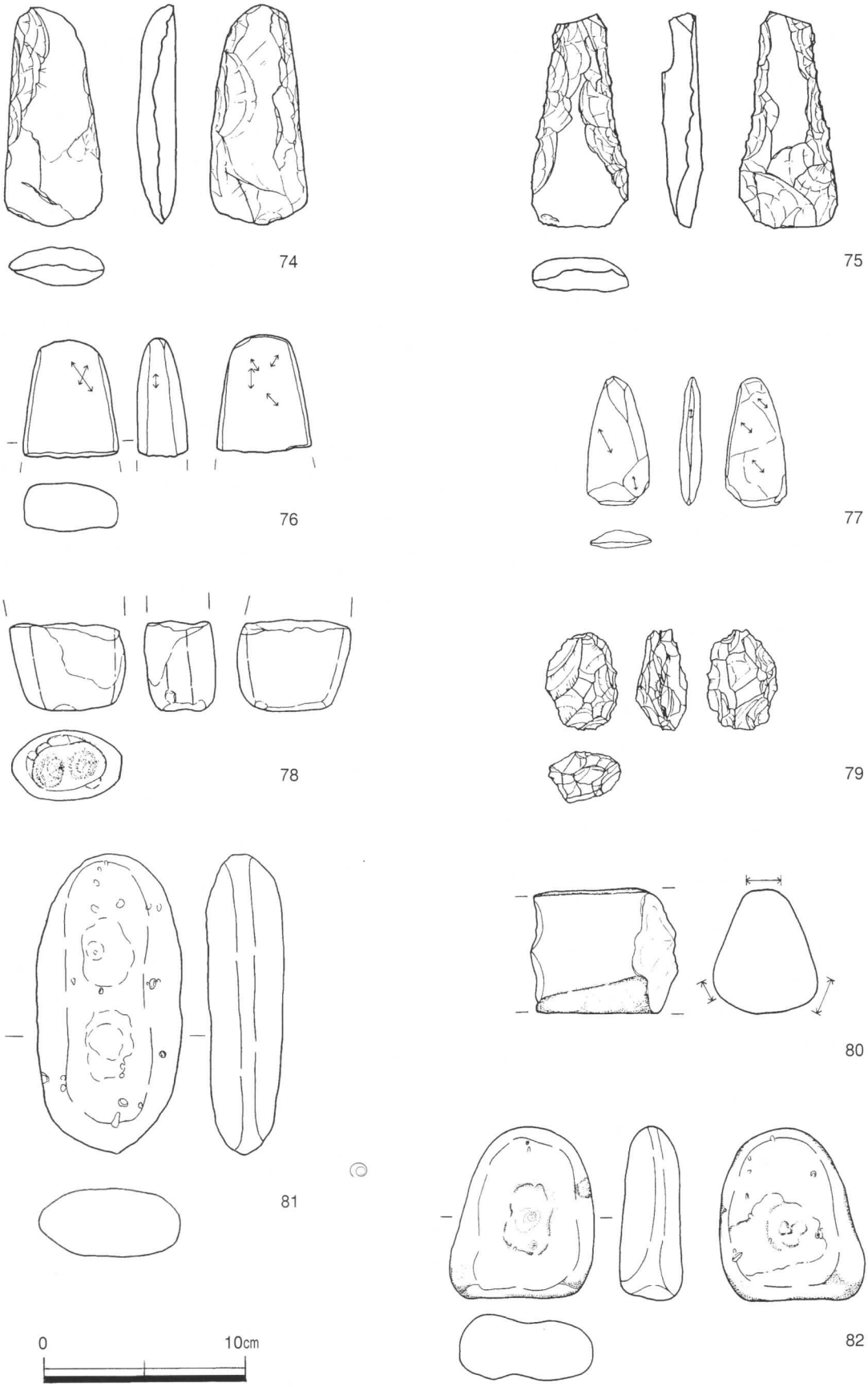
包含層から残存器高約6㎝の有台椀の破片が1点出土した。口縁は外上方に直線的に立ちあがり、高台は外方にふんばっている。調整は底部から体下部ほぼ1/3まで、ていねいにヘラ削りしている。時期的には平安時代の所産と思われる。



第12図　須恵器・寛永通宝

・寛永通宝

瓜割から出土した寛永通宝は、鋳造時期第一期にあたる1636年から1659年までに鋳造された通称「古寛永」である。瓜割で寛永通宝が出土したのは、遺跡の上にある塚へのさい銭か、あるいは単なる落し物などの行為が考えられる。



第13図　縄文時代の石器

5　まとめ

瓜割遺跡は、火焔土器を出土した馬高遺跡と同じ信濃川左岸の河岸段丘上に立地する縄文時代中期中葉を主体とする集落跡である。今回の発掘調査は、土地区画整理事業の調整池建設工事に伴って遺跡の南端部に相当する部分を対象に行った。その面積は300㎡とけっして広くはないが、縄文時代中期の竪穴住居跡１軒、フラスコ状ピット１基、それに集石土坑１基が位置していた。そして、旧石器時代終わりごろの細石刃石核原形とそのスポール、縄文時代中期中葉から後葉の土器・石器、縄文後期の土器、平安時代の須恵器と江戸時代の寛永通宝が出土した。

今回の発掘調査で得られた資料のうちで特筆する点は、旧石器の細石刃石核原形の出土、縄文中期の竪穴住居跡と集石土坑などが上げられよう。その中でもやはり細石刃石核原形の出土が最大であろう。このため、細石刃石核原形以外に旧石器時代の石器の存在を確認するために、旧石器時代の包含層と考えられる黄褐色土の地山を20㎝ほど掘り下げた。しかし、他には１点も石器はもちろん石器の剥片すら出土しなかった。長岡市内においてこれまでに確認されている旧石器時代の遺跡は、瓜割と同じ信濃川左岸の河岸段丘上にある３遺跡で、表面採集で小形石刃・彫器・尖頭器が各１点ずつ採集されていたに過ぎない。今回の発見は、長岡市内の旧石器時代遺跡を発掘調査で確認したという点が評価されるであろう。

瓜割遺跡が存在する五反田地内には、縄文中期中葉の大木８ａ式段階の竪穴住居跡が１軒確認されている。瓜割の南端部にある沢を隔てて瓜割から100ｍほど南に位置する三ノ輪遺跡がそれである。三ノ輪の竪穴住居跡は瓜割の竪穴住居跡とほぼ同様に規模が小さく、住居跡の覆土からは火焔土器と同時期の王冠形土器などが出土している（駒形敏朗『三ノ輪遺跡』「長岡市内遺跡発掘調査報告書」長岡市教育委員会　1997年）。瓜割と三ノ輪は沢を挟んで位置しているが、場合によっては同一の集落跡の可能性も指摘される。瓜割にも三ノ輪の住居跡と同じ大木８ａ式段階の遺構（フラスコ状ピット）が存在していることもその根拠のひとつに挙げられよう。だが、そのことを証明することは、現状ではきわめて困難である。平成２年秋の試掘調査で、瓜割と三ノ輪を隔てる地域に設定した試掘グリッドからは遺構・遺物ともまったく確認されなかったこと、地域住民の情報によれば、三ノ輪遺跡を含む地域はすでに戦前に存在していた病院の造成で削平されたと言われている。このことが、瓜割・三ノ輪が一つの集落かどうかの確認を困難にしている要因である。

第１号住居跡石組炉

瓜割、三ノ輪ともに面積的には小規模な部類に属する遺跡である。両遺跡から南へ約600ｍほどのところにあって、面積が２万㎡を超える火焔土器の馬高遺跡をこの地域の縄文中期社会の中核とすれば、瓜割・三ノ輪ともに馬高を取り巻く衛星的な集落といえよう。地域の中核集落である馬高は河岸段丘のやや中央部に位置しているのに対し、衛星的な集落の瓜割・三ノ輪は北西に広がる新潟平野の沖積地を眼下に臨む段丘の縁に所在している。このことは、広い面積を有する中核集落の馬高が、より広い面積を確保できるところに位置し、面積をさほど必要としない衛星的な集落は段丘の縁にあってそれなりの役割を担っていたものと思われる。このことは、将来に瓜割全体を発掘し、集落の内容を確認することに待ちたい。

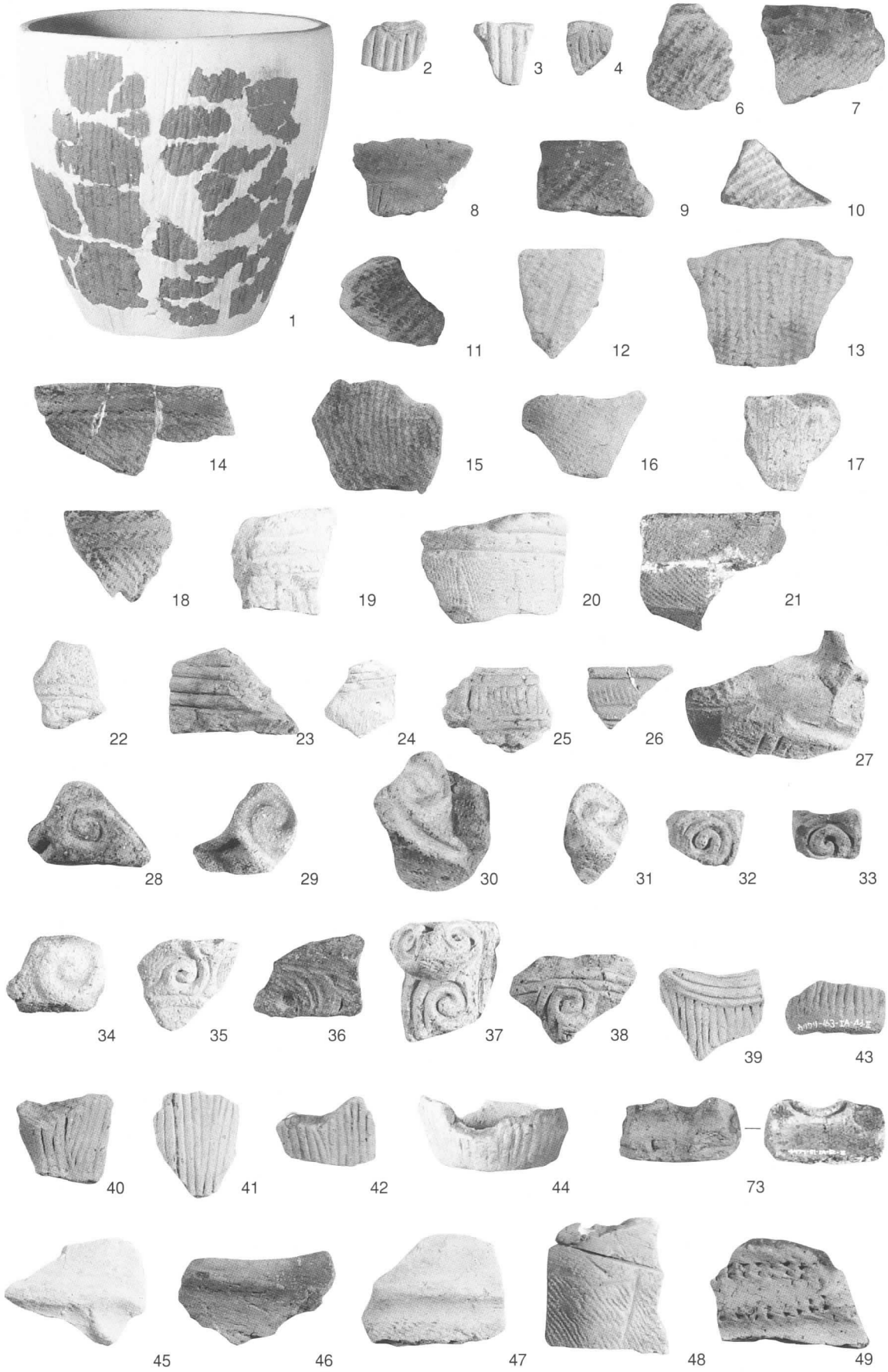


写真1　縄文土器（1）（S：1/3）

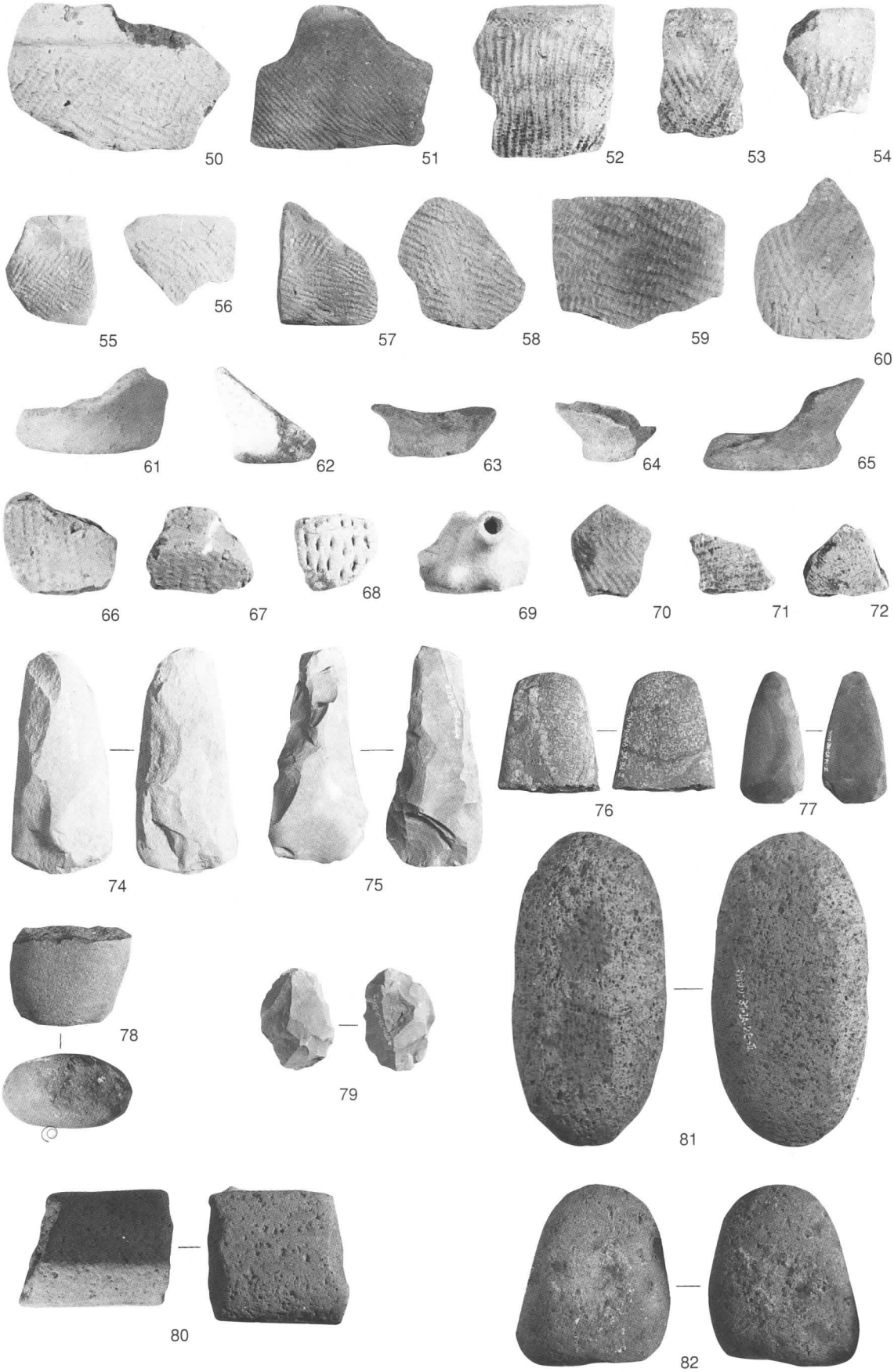


写真２　縄文土器（２）・石器（S：1/3）

報　告　書　抄　録

ふりがな	うりわりいせき
書　　名	瓜割遺跡
副 書 名	土地区画整理事業に伴う発掘調査
巻 次 数	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	駒形敏朗・小熊博史・立木宏明
編集機関	長岡市教育委員会
所 在 地	９４０－００７２　長岡市柳原町２－１
発行年月日	2000年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 °′″	東 経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うりわりいせき 瓜割遺跡	ながおかしごたんだまちあざうりわり 長岡市五反田町字瓜割	１５２０２	１７	37°27′18″	138°46′40″	1999年 ８月19日～ ９月20日	３３０	土地区画整理事業（調整池工事）

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瓜割遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代中期 平安時代	縄文時代 堅穴住居跡　１軒 フラスコ状ピット　１基 集石土坑　１基	細石刃石核原形　1点 縄文土器　30kg 打製石斧　5点 磨製石斧　3点 須恵器　1点	

瓜　割　遺　跡

―土地区画整理事業に伴う発掘調査―

平成12年３月25日発行

発行：長岡市教育委員会　　印刷：第一印刷所